随想

私の北海道 4

―社会資本の整備と北海道―

帯広市 前市長 砂川 敏文

砂 川 敏 文（すながわ としふみ）

昭和23年（1948）1月 香川県大川郡志度町生まれ
昭和41年（1966）3月 香川県立高松高校卒業
昭和45年（1970）3月 帯広畜産大学草地学科卒業
4月 農林省入省
昭和47年（1972）4月 北海道開発庁出向
平成9年（1997）10月 農林省退官
平成10年（1998）4月 帯広市長就任
平成22年（2010）4月 帯広市長退任

為政者のやるべきこと

国民の安心と安全の確保は、国家のあるいは為政者の国民に対する最大の責務です。

近代国民国家においてはもちろんですが、古代都市国家や部族集団でも、仲間や仲間の住む土地を外敵の侵入や脅威から守ることが、最初で最大の指導者としての仕事でした。

近頃、わが国の国境域、尖閣諸島、竹島、北方領土などで中国、韓国、ロシアなどが挑発的な行動を活発化させています。これは政権交代で誕生した新しい日本の政府の、この大切な責務に取り組む姿勢と意思とそしてその能力を試しているものと思われます。ふらふらとしている、その足元を見られているのかもしれません。

世界の現状をしっかりと広く深くそして冷静に分析して、確固たるわが国の安全保障政策、特に外交と防衛に関する諸施策を、大方の国民の合意とともに進めてほしいものです。

人が人らしく生活するために必要なもの

もうひとつ国としての大事な仕事があります。人が人らしく生活するために必要な生活基盤や産業基盤などの社会資本を整備し国民に提供することです。

ローマ帝国の皇帝は、外敵からの防衛を第一の任務と心得、長大な国境線の維持に腐心し精力を尽くしました。それと同時に社会資本の整備を公共事業として強力に進めました。ローマを中心として帝国内の諸都市をネットワークする高規格な舗装道路（ローマ街道）の建設は、人や物そして情報の大量かつ高速な流通を可能にし、経済活動を飛躍的に高めるとともに、いざというときの軍団の速やかな移動を保障しました。日本の律令国家も山陽道や東山道などの基幹的な街道を建設しました。大幅員で線形もよい立派なものだったようです。いずれも今風に言うと、高速道路網の整備を国家プロジェクトとして強力に推進したというところでしょうか。

アッピア街道（ローマ市内）

ローマ水道：ポン・デュ・ガール（フランス）

水は万人の生活に欠くことのできないものです。特に乾燥気候の地中海世界では、水源の確保と都市への安定的な供給は重要課題です。山間の水源から都市へ清らかな水を大量に運ぶ水道の建設が公共事業として行われました。大規模な水道橋の遺跡が残されています。あわせて下水道も整備されました。おかげでローマなどの市民は清潔な水をふんだんに使い、毎日入浴を楽しむなど、衛生的で快適な都市生活を享受することが出来たのです。

水はありがたい天の恵みですが、時として生活を危うくする脅威にもなります。中国に「水を治めるものは天下を治める。」という言葉があります。古代帝国以来、中原を潤す大河川の治水事業を行い洪水を防ぎ水運を盛んにして、庶民の生活を安定させ経済を振興することの出来る者こそが天子たりうるということだと思います。現代中国で黄河がしばしば断流現象を呈するそうですがどのように考えればばよいのでしょうか

家康の入府以来いち早く、江戸幕府は後背地である関東平野を乱流する利根川や荒川、鬼怒川などの大河川を対象に瀬替えなどの治水事業を進めました。その

立川市内を流れる玉川上水
延長：43㎞　取水元：多摩川（羽村取水堰）
流域：東京都　備考：国の史跡

結果、江戸市街地の安全度は高まり、舟運も盛んになり、広大な荒地の開拓も可能になりました。また玉川上水の開削を督励して江戸市民への上水の供給を確たるものにしました。羽村の堰から四谷大木戸までの十余里は開渠で、そこからは木製や石製の管路を江戸市中に張り巡らし、市民の生活用水を安定的に供給する体制を整えました。これらの事業が、豊かな関東平野を後背地に持つ大江戸発展の礎になったのです。

必要な社会資本の変遷

「人が人らしく生活するために必要な社会資本」といってもその範囲や中身は時代時代によって変わってくることは明らかです。明治の十勝開拓の壮途といわれる民間結社晩成社はバターなどの乳製品の製造はじめ数多くの先進的な事業に取り組みましたが、その殆どが失敗し、晩成社の理想の実現も不本意な結果に終わりました。リーダーの依田勉三はあるとき「道があれば、道さえあれば（晩成者は成功していた）・・・・」ともらしています。勉三は現代の高速道路のような道を望んだわけではありません。四季を通じて馬車が安全に通れる道があればよかったのです。しかしそれでは現代の社会資本としては不十分なことはいうまでもありません。

社会資本として伝統的なものは、治水や海岸などの国土基盤、道路や鉄道、港湾空港などの交通流通基盤、土地改良や森林整備、漁港などの産業基盤、上下水道や公園などの都市生活基盤などがありますが、現代においては光ファイバーネットワークのような、情報通信基盤も不可欠です。新しく必要になる社会資本が増えるとともに、それぞれの類型の中で質的な高度化が進んでいます。さらにいえば医療や年金などの社会保障、教育や基礎的な科学技術の振興の制度といったソフトなシステムも大事な社会資本ということも出来ますが、ここでは触れません。

縁の下の力持ちとそれを支える人たち

こうした社会資本の整備には多額の費用がかかり、長い時間を要します。一方その効果については目に見える形や数字で示すことはなかなか難しく、社会や経済が順調に運営されている平時においてはわれわれ市民がその恩恵を意識することもあまりありません。多くの社会資本の整備が利潤を追求する民間事業ではなく、

公共事業あるいは公的事業として進められている由縁です。

二〇一一年九月北海道地方は低気圧などの影響で大雨に見舞われ、道央、道東など広範囲で大洪水になると心配されました。十勝地方でも十勝川が増水し、支流の音更川で大きな被害が出たことは記憶に新しいところです。しかしながら、これだけの雨が降ったにもかかわらず、この程度の被害で収まったのはこれまでの十勝川の治水事業のお陰だと私は思っています。

十勝川本川では上流の十勝ダムをはじめ、帯広市街中心部に近い十勝大橋地点で行われた木野引堤事業（堤防の間を広げ川幅を広くする）や千代田堰堤付近で新水路を開削した千代田新水路事業などが効果を発揮し、帯広都市圏を洪水から守りました。

帯広の市街地は貫流する帯広川や売買川の氾濫に常に悩まされてきましたが、札内川に合流していた帯広川をより上流で十勝川の本川に直接落とす帯広川放水路や、売買川をより上流で札内川に落とす売買川放水路が、上流の札内川ダムと合わせて効果を発揮し、今回の大雨でも帯広の市街地は大きな脅威を感じることはありませんでした。帯広市街の洪水に対する安全度は飛躍的に高まっているのです。私も千代田新水路と売買川放水路の状況を観察しましたが、もしこれらが完成していなかったらどういう状況になっていたかと、背筋の寒くなる思いがしたものです。

千代田新水路

開拓以来北海道は寒冷な気候のため、米作など農業の限界地でした。三年に一度は冷害に見舞われ収穫が不安定。やっと収穫できても品質が悪くて買い手がつかないという状況だったと思います。ところが今は全国一の大農業地帯になっています。この背景には冷涼な気候に適した酪農畜産の振興や甜菜などの作付け、日本でもトップレベルの美味しさを実現した米に代表される麦や野菜など作物の品種改良の営々たる努力。そして各種の栽培技術や貯蔵技術の改良進歩があることはもちろんですが、もうひとつ土地改良など農業基盤整備の進展が与かって大きな力を発揮しています。湿性火山灰地が広く分布する十勝では農地の排水をよくす

昭和50年8 月22日～24日
帯広川の溢水氾濫により 湖と 化した住宅街（ 帯広市西13条南2 丁目付近）

ることが生産性向上の鍵でした。排水が悪いと地温がなかなか上がらず冷害というか湿害、冷湿害の様相を呈するのです。十勝の優良な大農業地帯誕生は明渠排水や暗渠排水などの排水改良を中心とする農業基盤整備の成果ともいえるのです。まだまだこのような事業が必要なところがありますし、既に整備された排水設備は日常の維持管理が欠かせませんし、経年による老朽化に対応して更新改良が必要です。このようなことを來帯された高名な評論家に話したところ、やはり必要な基盤整備事業、公共事業は着実に実施することが大事だということで意見が一致し、心強く思いました。近年公共事業性悪説、不必要論、無駄使い論が幅を利かせているように思えるからです。

たしかに公共事業をめぐって国民の信頼を揺るがすような不祥事が頻発したことは本当に残念なことです。関係する人や組織、企業の中には不心得者が後を絶たないの事実です。しかしそうした例は全体の中ではごく少数です。殆どの者は「自分は仕事を通じて日本の社会を基礎の部分で支えているのだ」という自覚と誇りを持って、使命感とともにまじめに仕事に励んでいるのです。計画や事業の立案者は国民の安心安全や福祉の向上、地域の発展を願いながら。現場で作業をする人はいつか「これは俺の仕事だ」と孫達に自慢できる日を夢見たりしながら。

と言ってもそうした使命感や思いに頼るだけでは不都合が出てくるのを防げないというのがこれまでの経験ですので、公共事業の立案、予算、執行といった一連のシステムを見直し、改善することが必要だと思います。現にいろいろな改善策が講じられてきていますので、さらに良いものになるよう期待しているところです。

いずれにしても、社会資本の整備、公共事業の意義や必要性は人間の社会、歴史が続く限り変わらないと考えているのです。

旅する民俗学者と言われた宮本常一は、日本中殆どの町や村を自分の足で歩き調査したそうです。農村、山村、漁村の多くの集落を尋ね古老の話を聴き、古来の暮らしの様子を記録し、高度成長期に起きた大きな変化を確認し、今後の集落と住む人たちの行く末を案じる宮本。海の民の住む離島集落の維持振興にも心を砕き、「離島振興法」の父ともいわれます。日本中に無数にある小さな集落その全てに人が暮らしています。住民の生活の基盤を整え生活の糧を確保する実践のひとつの表れと考えています。宮本に共鳴し行動をともにした人たちの中に、山村振興を担当する林野庁や漁業振興に携わる水産庁の職員が何人もいたと聴くと、日本の公務員の良質な一面を改めて発見した思いで嬉しくなります。

国土の均衡ある発展と新しい風土記

東日本大震災や原発事故、最近ではタイ国の大洪水など大きな災害や事故に遭遇して、いま「レジリエンス」の大切さが盛んに言われています。精神科や環境分野で主として用いられる言葉ですが「困難な環境を生き延びる適応的な能力」のことです。個人や企業、地域社会や国家などに「レジリエンス」がきちんと備わっていなければ、全てが順調な平常時は問題ないけれども、非常時、有事に直面すると破綻をきたし崩壊の危機に瀕するなど、大混乱に陥りかねません。

一極集中と多極分散、大規模集中と小規模分散、中央集権と地方分権、官僚化した大企業と小回りの効く中小企業、どちらの「レジリエンス」が高いかは容易に想像できます。社会経済の諸制度、国土経営の考え方、企業経営の有り様などにおいて、平時の効率を重視する観点と有事の「レジリエンス」の観点の双方をきちんと評価し、慎重にバランスをとっていくことが大事です。

戦後復興期、高度成長期の国土計画である「全国総合開発計画（全総）」、「新全国総合開発計画（新全総）」は、「多極分散型国土」あるいは「国土の均衡ある発展」という理念を具体化しようとしたものであると考えています。そしてそれは一定の成果を挙げてきました。

今急速な発展を遂げつつある中国の地方幹部の一人は日本から学ぶべきこととして、「環境生態系への配慮、都市部と農村部の格差が少ないこと、人々の仕事に対する真面目さや責任感の強さ」の三つを挙げています。同じく中国を追走する大国インドのある有識者は「日本の過去の発展プロセスからインドが学ぶものは多い。国土の均質な発展もそのひとつ。どんな地方都市も道路や鉄道、病院などの基本的な社会インフラが整っている。インドにはまだ水道設備も電気も電話も無い農村が多い。」旨述べています。期せずして高度成長期の社会経済が直面する課題のひとつが明らかにされていると思います。

しかし、「国土の均衡ある発展」は高度成長期だけの課題なのでしょうか。人口の爆発的増加が収まり高齢化が進んで経済も安定した社会にあっても、常に追求すべき理念であると私は考えています。特に狭い国土に多くの人口を抱える日本にとっては重要ですし、その実現は、他の大国に比べれば容易であると思います。もちろん、そのための地方部の整備に必要な基本的社会インフラの内容は、時代によって変わってくることは先に触れました。

国土の均衡ある発展を追及することで小規模分散ネットワーク型社会の姿が見えてきます。いざというときには被害やその全体への影響を最小限にとどめ、短時間での回復を可能にする、「レジリエンス」にとんだ強くしなやかな日本が作り上げられるのです。そのとき、北海道をはじめ日本の各地方、各地域は個性を生かしながら地域力を高めしっかりと国土を管理し、住民の福祉の向上に努めていることでしょう。律令時代の風土記とは異なった、華やかで誇り高い新しい時代の風土記がたくさん編まれるのを期待しているのです。なかでも新しい「北海道風土記」が一番中身が豊富で充実し、楽しいものであることはもちろんです。